女川 新長田に学んだ復興

写真は大型の商業ビルが立ち並ぶ JR 新長田駅前、再開発エリアにある大正筋商店街(朝日新聞 12 月 24 日朝刊 1 面)。阪神・淡路大震災の復興事業として最大規模の「新長田駅南地区」再開発について、神戸市は 23 日、検証結果を発表した。総事業費 2279 億円が投じられ、下町は高層ビル街に一変。報告書は人口が 1.4 倍に増えたとする一方、商店街ににぎわいが戻らないといった課題を指摘。大きな見直しがないまま事業が長期化し、赤字が膨らんだ点など行政側の問題も問う内容となった。

新長田は震災 1 ヶ月後から「定点観測」を続けてきた。「復興災害」といわれた再開発について、検証結果を吟味していきたい。ここでは社会面の表題記事に注目したので抜粋して紹介する。女川には 2 年半前ほどに、駅前の商業施設「シ―パルピア女川」などを駆け足で回った。

2011 年の震災で、家屋の 9 割が被災した宮城県女川町。JR 女川駅から海岸にかけて 1 階建ての商業施設が並び、カフェや雑貨屋が集まる。「新長田に行かなければこうはなっていなかった。私たちは新長田に救われた」。女川町公民連携室室長の青山貴博さん(48)は言う。復興計画をつくり始めた 13 年秋、商店街関係者らと新長田を視察した。

新しい高層ビル群と対照的に、中を歩くとシャッターを閉めた店が多く、止まったままのエスカレーターが印象的だった。新長田の焦点主からは「女川では身の丈に合ったまちづくりをしてほしい」と託された。その言葉は復興計画のスローガンになった。町は入居する店舗が必要とする大きさで新しい商業施設を設計。行政と民間の連携を強めるため、14 年 4 月、町に公民連携室を創設した。

新長田駅前は震災前、町工場や長屋が軒を連ね、商店街は地元の買い物客でごった返した。震災でほとんどの店が焼失や全半壊した跡に神戸市が高層ビルを建て、そこに商店街が入った。戦前から続く「大正筋商店街」で定食店を営む横川昌和さん(58)は、女川町から来た青山さんらに思いを語った一人だ。震災後、新しいビルの 1 階で再出発したが、店は再開発ビルの中でも駅から遠く、特に人通りが少なくなった。高層マンションができて人口は増えたが、なじみの客らは町工場などとともに消え、客足は震災前の 4 分の 1 以下になった。

ビルの管理費月約 3 万 7 千円が新たな負担になり、固定資産税も上がった。ところが、同じビルの商店主が店舗を売却したところ、価格は購入時の 5 分の 1 以下だったという。「事業は明らかに失敗」と横川さん。検証結果について「誰が責任を取るのか書かれていない。失敗した事業の責任を取らされているのは我々だ」と憤る。

(2020 年 12 月 25 日)